

PHOTO BY LESTER COHEN / wireimage.com

THE VINES

5月来日公演決定！

俺のエキセントリックなところが受け入れられたから、アーティストになったのは良かったね

クレイグ・ニコルズ／The Vines　INTERVIEW：YUKO KATO



PHOTO BY SUSANNA HOWE

長い一日の終わり、やっと捕まえたクレイグ・ニコルズは、疲れ切った声で"大丈夫、元気だよ"と答えた。予定を早めてアメリカ入りした彼らヴァインズは、当然のようにスケジュールに追いまくられ、やっとのことでクレイグを確保したら、時計の針は午後10時を回っていた。ヴァインズのアメリカにおける評価は、たった1枚アルバムを出しただけで、とてつもない高得点をマークしている。その代償がこのスケジュールというわけなのだろう。

――ニュー・アルバムの「ウィニング・デイズ」（日本発売3月17日）なんだけど、まずこんなに素晴らしいアルバムを作ってくれてありがとうと言いたいわ。
クレイグ・ニコルズ（vo.／g.）：ありがとう！そんなこと言ってくれて、嬉しいよ。
――このタイトルは、収録されている中の1曲なわけだけど、必ずしもいい意味ではないのよね？
クレイグ：そうだね。この曲は皮肉っぽくて感傷的でもあるから…でもどっちかと言うと感傷的な部分の方が強いかもしれない。この曲を書いた時、若い頃っていうのは何物にも対処しなくてもいられるんだってことを考えていたからね。でもね、こうやって俺が書くことが大袈裟に取り上げられることが多いんだ。俺の個人的な内容を書いていたりもするんだけど、ネガティヴな曲にしようとしてるわけじゃないんだよ。ネガティヴって言ってもメロディはハッピーなままだから。
――このタイトルは、今のあなた達の状態を現しているのかしら？たった1枚アルバムを出しただけで今はもうかなりの人気じゃない？
クレイグ：どうなんだろう…自分達ではほとんど分からないんだよね。人はそれぞれ意見が違うし。もし俺達の音楽を気に入ってくれる人がいたら、それは嬉しいけどね。
――曲は全てあなたが書いてるのよね？
クレイグ：ああ。
――アルバムのカバーもあなたが手掛けたんでしょ？
クレイグ：そうなんだ。
――っていうことはこのアルバムは凄くパーソナルなものなのね。いわばあなたのジュニアみたいなものよね？
クレイグ：うん、その通り。それは上手い言い方だね。
――このアルバム作りのプロセスでは、周りから隔離された環境で作ることだけに没頭していたの？
クレイグ：そうなんだよ。ニューヨークのベアーズヴィルっていう所に行ったんだ。そこは森の中みたいなところで、その時に最高だと思った環境でやってみることにしたんだ。
――でも曲を作ったのはあなたでしょ？
クレイグ：俺はほとんどの曲のアイディアとアレンジを考えたけど、他のメンバーもそれぞれ貢献した部分があるんだよ。俺はベーシックなラインは考えないんだ。一緒にジャムって作っていくって感じかな。
――あなたは常に曲を書いてる方なんですって？
クレイグ：うん、常に絵を描いたりしてるけど…確かにいつもアイディアは頭の中にぐるぐるしてるよ。
――自分は独自の世界を持っていると思う？
クレイグ：そうだね。俺は音楽で自分の特別なスペースを作っているんだよ。音楽をレコーディングするプロセスは凄く楽しいしね。10代の頃に音楽に凄くハマって、いつも音楽を聴いていたし、それが自分のやりたいことだって分かったんだ。
――前作「ハイリー・イヴォルヴド」は、恋愛や若者の問題についての作品だったけど、今回は何についてなの？
クレイグ：凄くシンプルなことについてだよ。
――人生はシンプルだと思う？
クレイグ：それは分からないし、混乱する時もある。俺に出来るだけのことはしてるけどね。ただ確実なのは、俺達は自分達のしてることに満足だってこと。アルバムを作るにあたって準備もかなりしたし、この曲を入れようだとか、歌詞の内容を把握してそれで大丈夫かをチェックしたり、アレンジをチェックしたり、自分達がきちんとプレイ出来るかチェックしたりしてたんだ。そうすれば、すぐにレコーディング出来るからね。
――これは本当かどうか分からないんだけど、このアルバムのレコーディングに入る前にバンド内の状態が最悪で、長いお休みが必要だったそうね？あなたも凄く大変な状況だったって聞いてるわ。
クレイグ：そうだね、そうかもしれない。ツアーをしてる時って、凄くぐちゃぐちゃでどうしようもなくなる時があるんだ。でもそれと同時に、ツアーで知らない土地に行って知らない人達の前でプレイするのが物凄く楽しくもあるんだよね。パリに行って何千人ものオーディエンスの前でプレイしたこともあったし…だけどさ、こんなことをしていられるだけでハッピーなんだよ。
――あなたが荒れて物を壊しちゃったり、テレビ番組に来なかったことがあったって聞いたんだけど、何があったの？自分を抑えられなかったのかしら？
クレイグ：それは分からないな…何やったのかあんまり覚えていないんだ。音楽を信じているし、そんなに酷いことはしてないと思うんだけど。

優れたアートを作って、それをみんなと分かち合う為にいい音楽を作りたいとは思っているけどね

――あなたみたいな才能に溢れるアーティストは、人間としてはエキセントリックなところがあるものよね？だって、アーティストって普通の人じゃないじゃない？
クレイグ：うんうん、確かにそうだよね。だからアーティストになるのはいいことだったんだよ。俺のエキセントリックなところが受け入れられるから（笑）。いい音楽を作ってそれをみんなに聴いてもらう、それが俺の信じることだから。もし自分がいい音楽を作ることが出来たら、受け入れてもらえると思ってて。うん、だから俺に合ってるんだと思う。小さい頃は、自分が大きくなったら何をするか分からずに、随分悩んだものさ。だけどバンドをやるようになってから、みんなが俺の作る音楽がいいんじゃないって思ってくれたから、良かったね（笑）。
――あなたが作ったアルバムのカバーはどんな感じなの？
クレイグ：アルバム・カバーはね、自画像みたいな感じなんだよ。
――あなたの？
クレイグ：うん、そう…っていうか、カリカチュア（風刺画）みたいな感じかな。俺達4人の絵なんだけど、アルバムを表現してるっていうのかなあ。俺達が持っているものを説明したような絵になってると思う。
――写真じゃなくて絵を使ったのはなぜ？
クレイグ：一度誰か他の人が描いた俺達のバンドのカリカチュアを見せてもらったことがあって、素晴らしいアートだなって思ったんだ。でも別にそこで自分でもカリカチュアを描いてみようって思い立ったわけじゃないんだよ。けど凄くクールな物の見方だと思ったし、俺のロックへの考え方と同じだと思ったわけなんだ。それと同時に、その絵には何も意味がないんだけどね（笑）。何にでも可能性はあるわけで。
――レコーディングは2度目だけど、バンドとして一緒に仕事をする上で発展したことって何かしら？
クレイグ：レコーディングのプロセスが掴めるようになったから、しっかりと予定を立てられるようになったね。だからかかった時間も前より少なかったし…。何よりも自分達がもっと楽しめるようになったと思う。サウンド面でももっと実験的なことが出来るようになったし。
――いい音楽を作ろうとしてプレッシャーがかかりやすい方？
クレイグ：その時にプレイしてる曲によって、プレッシャーも違ってくるよ。だけど自分達が何をしてるのかをしっかり把握するようにしてるし、そもそもアルバムをレコーディングするのは好きだから。優れたアートを作って、それをみんなと分かち合う為にいい音楽を作りたいとは思っているけどね。
――このニュー・アルバムから4曲は、既に前作のツアーで披露してるわよね？
クレイグ：そう、その通りだよ。
――まっさらな曲だけを収録しなかったのはなぜ？
クレイグ：ただその曲が好きだっただけなんだけど、サウンド面でも結構新しいことが出来たと思ってるし…ただヴァイブが気に入ってるんだよね。ステージでプレイすればするほど、その曲をもっと理解出来たっていうところもあるし。だからそういう面でも、その4曲はかなり上手くいったと思うね。
――このアルバムは、5曲目で分かれてるみたいだって言ってたわよね？2分割してるってことでしょ？
クレイグ：うん、そうだと思うよ。
――だけど私はそう思わなかったの。分割した最初

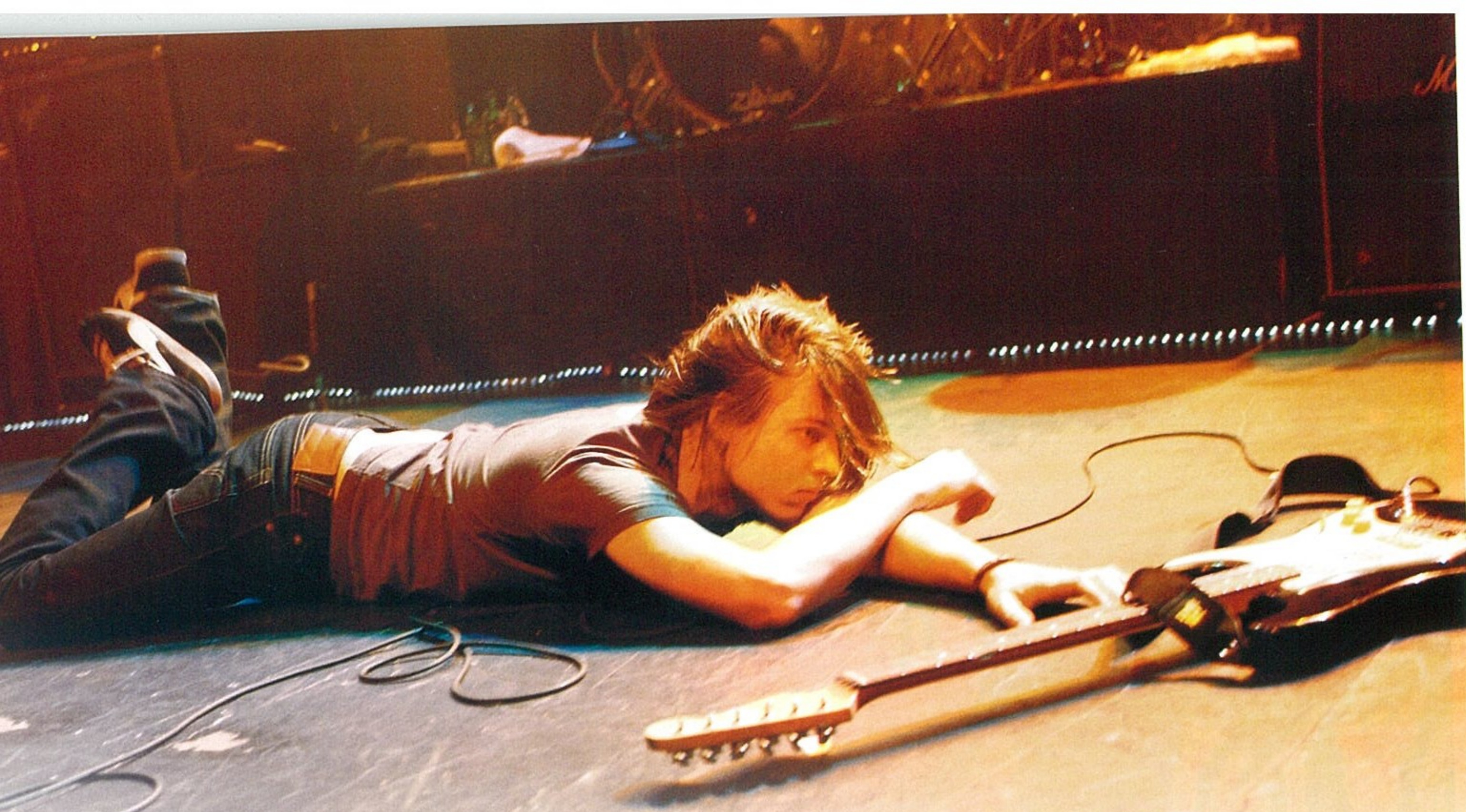


PHOTO BY FRANK MULLEN / wireimage.com

の部分の中の曲にも、素敵なメロディを使ったバラードがあったりするじゃない。

クレイグ：俺もそう思う。ヘヴィな中にもスローなところがある曲もあるし、バラードでも他のヘヴィな曲より速いテンポの曲もあるしね。

――アルバムがふたつに分かれてるって思って欲しい？それともそうは思って欲しくない？

クレイグ：俺達のこのままを見て欲しいね。いろんなことをしてるし、別に何も考えずそのままで見て欲しいかな。

――「オータム・シェイド・パート2」っていう曲があるけど、これは前作に収録されていた曲の続きなの？

クレイグ：そうなんだよ。

――だけど歌詞的にはほとんど何の繋がりもないわよね。どうしてこのタイトルにしたの？

クレイグ：ただ前作の「オータム・シェイド」とヴァイブが似てると思ったんだ。曲を書いてる時にメロディを聴いてて、つい同じような歌詞を歌ってたんだよね。うん、それに最初の「オータム・シェイド」は凄く誇りに思ってる曲だから。

――「ファック・ザ・ワールド」について訊きたいんだけど、本当に世界をめちゃくちゃにしたいと思っているの（笑）？

クレイグ：いや、そんなでもない。今の世界ってさ、本当に問題が山積みだから、これからどんどん悪くなる一方だとか、汚染だの何だので世界が終わりを迎えてしまうんだって感じたりするよね。だから環境問題の曲だとも言えるし、“ファック・ザ・ワールド”って言う時には、皮肉として言ってたんだよ。だけど本当のところ、みんなには世界を大事にして欲しいとは思うし、かと言ってあんまり説教臭くはなりたくないんだよね。

ドラッグって別に必要不可欠なものってわけじゃなくて、オプション的な存在じゃないかな

――この曲であなたが誤解されることになるとは思わない？

クレイグ：かもね、それもあり得るね。俺にインタビューをする人達は、俺達のバンドが真剣なのか、本気で言っているのかが分からないみたいなんだ。俺にはあまり分からないけど…実はレコーディングにも完全に満足したわけじゃないんだよね。上手くいかなかった部分もあるから、全面的に肯定してるわけじゃないんだ。だけどアルバムってそういう感じでいいと思うしさ。

――昨日インタビューしたアーティストが言ってたんだけど、自分の作ったアルバムはパーソナルすぎて聴けないんですって。曲を聴く度に辛いからなんですってよ。あなたは？

クレイグ：俺の場合は何度も聴くから、そこのところは違うね。自分のアルバムを聴かないなんて考えられないよ。時間も労力もかかっていて、物凄くパーソナルなものなんだからさ。人が何をしてもいいけど、俺の場合は自分の仕事に夢中だから（笑）。もちろん他のアーティストの音楽もかなり聴くし、そっちの方もおもしろいと思うけどね。

――そうよね、あなたはスウェードのブレット・アンダーソンが好きなんですものね。

クレイグ：そうなんだ、スウェードは大好きなバンドだよ。

――ブレットは今バーナード・バトラーと和解してるって、聞いた？

クレイグ：うんうん、聞いたよ！いいニュースだと思うな。

――お互いに嫌い合っていたのに、面白いわよね（笑）。

クレイグ：だよね（笑）。どうなるのか分からないけど、俺はスウェードではギタリストのリチャード・オークスが凄く好きなんだ。素晴らしいギタリストだと思うし、バンドにも上手く溶け込んだよね。

――あなたのインタビューやバイオを読んで、若い頃のブレットと似た道を歩んでいるなって思ったの。

クレイグ：それは素晴らしい褒め言葉だね、ありがとう。

――日本でブレットは人気だから何度もインタビューをしたことがあるんだけど、彼、随分変わったじゃない。

クレイグ：ああ、凄く変わったよね。

――昔、電話インタビューをした時にドラッグをやってて、凄く変だったの。だけどドラッグをやめてから凄く普通のいい人になったのよ。

クレイグ：うん、凄く変だよね。でも彼は素晴らしいレコードを何枚も作り出したよね。

――ドラッグってミュージシャンには必要なものだと思う？ローリング・ストーン誌には、あなたもマリファナを吸う時があるって書いてあったわ。

クレイグ：いや、マリファナはもうやめたんだ。それにさ、ドラッグって別に必要不可欠なものってわけじゃなくて、やることもあるっていうオプション的な存在じゃないかな。俺にとってはどうでもいいことかな。過去にやったことはあるけど…説明するのは難しいなあ。

――音楽を作る為にはあえて不健康である必要があると思う？いい音楽を作る為に健康までも犠牲にしなきゃいけないものかしら（笑）？

クレイグ：そうは思わないね。そうしていい音楽を作る人もいるけど、それがドラッグのおかげかどうかは分からないし。だけどいい音楽を作るアーティストっていうのは元々才能のあるアーティストなんだと思うな。ドラッグは影響力の強い物質ではあるけど、そこまでではないと思うからさ。

――今のあなたの状態は？

クレイグ：リラックスしてると同時に、不安でもあるかなあ。

――不安になる必要なんてないわよ。みんなこのアルバムを気に入ってるんだから。

クレイグ：うん、みんなそう言ってくれるし、それは凄く嬉しく思ってる。俺は凄くシンプルな人間だから、ちゃんと食事をして睡眠を取るとかそういうことに気を配ってるんだ。そうしないと音楽なんて生まれないから。うん、だから普通の生活をするようにしてるかな…気分は随分いいよ。

――来週アメリカに向かうそうね？

クレイグ：今アメリカにいるんだよ。今はね、たぶんハリウッドにいる…はず…。

――あなたはオーストラリアにいる時がリラックス出来る時だからって、オーストラリアにいる時にインタビューをした方がいいって言われて、今日セッティングしたのに〜。

クレイグ：俺もどうしてなのか分からないんだ（笑）。

――最近読んだ本や出会った人から、何かインスピレーションを受けたことはあった？

クレイグ：「イヴィル・タウン」はアメリカからインスピレーションを受けたんだよ。だけど今んとこ思いつくのはそのくらいかなあ。だけどバンドでだろうが何だろうが、いろんな国に行くのはおもしろいい経験だよね。

――日本にはいつ来てくれるの？

クレイグ：2、3カ月の内に行くんじゃないかな…でも確定はしてないんだ。行くってことだけは知ってるんだけど。

――じゃあその時にあなたの音楽についてもっと話が出来るわよね？

クレイグ：うんうん、クールだね！

1月29日　ロサンゼルスにて収録